

大学図書館問題研究会 京都

〒607 京都市山科区大宅山田町34 京都橘女子大学図書館 小林倫道気付
(Tel) 075-574-4118 (Fax) 075-574-4124

書誌学の深淵 — 林 望著 「書誌学の回廊」を読む

篠原 俊夫

現在、もっとも注目を集めている書誌学者として、林望と高宮利行の二人の名前をあげることには異義を唱える人はいないだろう。二人は脚光をあびるスタープレーヤーであり、この二人に勝る実力と業績がありながら、世に知られない大書誌学者もいるに相違ない。

学問としての書誌学の存在を知る人は、研究者や図書館員を除いたら、多くはないと思われる。知っているという人でも、正確に理解している人は一握りほどしかない。

知られざる世界というほど、大げさではないにしても、閉却された学問領域にいま一度光をあて、その面白さ、大変さを誰にも理解できるように紹介したという点で、この二人には、際立った功績を認めてもいいのではないかと考える。

1991年から続々と刊行されはじめた林の著作は、すでに15点を越え、20点に達するの間近と見える勢いである。著作のすべてが書誌学に関するものではないとしても、書誌学がらみの内容が圧倒的に多い。

林自身が「書誌学の回廊」で述べているように、書誌学という学問が地味でむくわれないうわりに、一人前に育つまでに時間がかかる。いきおい、学問としての書誌学をこころざす人は多くない。師とするに足る人は少なく、貧しさに耐えて、独学で峠の細道をどこまでも辿る。林の説明を待つ迄もなく、わたしのイメージのなかの書誌学者の像はいささか暗い。そして、世間一般の抱いている図書館員の像にどこか通ずるものがある。もっと厳密に言うと、明治、大正、昭和の末期頃までの大学図書館には、仄暗く、黴臭い書庫の片隅に牢守のように、このタイプの図書館員の姿が見られたに相違ない。

とはいえ、これは多くは書物を通じて得られた、わたしなりの、そして多分に通俗的な図書館員像であり、わたしが現実に大学図書館で働きはじめたころには、伝説的な存在として知り得るのみであった。たとえば、天野敬太郎という図書館界の大先輩の名前を記憶されている方も多いと思うが、この方は体が動くかぎり現役の書誌学者であろうとした人だった。70才を過ぎておられたと思うのだが、わたしが京都大学附属図書館にいた、20年ほど前、天野氏は必要があって、京大附属図書館の書庫に入り浸って、書誌的な調査を相当長期間なさっていたことがあった。腰も曲がって見るからに痛々しい姿なのに、開館を待ち兼ねて書庫に入った天野氏は、飲まず食わずで閉館近くまで、作業を続けられることが多かった。わたしには到底考えられない、不屈の精神力に鬼気迫るものを感じたことを今も鮮明におぼえている。図書館員だからと

目次	書誌学の深淵（篠原俊夫）…………… 1頁
	大図研京都数珠つなぎ…………… 6頁

言って、門前の小僧習わぬ経をよむなどと気楽なことを考えていたわけではないが、私の眼前にある書誌学の鬼は、私の奥深い内面に潜む甘えた幻想を吹き飛ばすのに十分な迫力を全身にみなぎらせていた。

天野敬太郎の名前をあげたのは、偶然身近に接する機会を得たからというに過ぎず、それ以上の意味はない。天野敬太郎の名前をあげたら、ついでにと言ったら叱られるかも知れないが谷沢永一にも言及しないと方手落ちになる。谷沢はまぎれもなく書誌学の大家であるが、専門は国文学者であって、書誌学そのものを専門分野としているわけではない。

その谷沢は名著「読書人の立場」(桜楓社 1977年)に収載した一文、「蒐書学序説」のなかで、自分がどんな人々から書誌学上の教示を与えられたかについて、主立った人々の名前をあげているのだが、そのうちの一人である天野との係わりを以下のように述べている。文章が話言葉になっているのは、もともと、図書館員の研修を目的とした会合での講演がもとになっているからである。

「(前略)・・・殊に私が近代文学の勉強を始めました頃は、全国的にも近代文学の本当の専門家の学者という方、プロの学者と言える方が殆どおられませんでして、むしろ私は、どういう方々に教わったかと申しますと、第一は古本屋さんでございまして、亡くなりました大阪の伊藤一男さんとか、健在な方では磯本文一さん、戦後は道頓堀の天牛の番頭である尾上蒐文洞さん、萩の茶屋の津田喜代獅さん、神戸元町の黒木正男さん、そういう本屋さん達に、わたしはもう一生懸命いろいろ質問して教わることで、勉強をはじめたわけでございまして、もう一方の先生方は、これは私が奉職いたしました関西大学の図書館の方々、なかんずく当時の図書課長に天野敬太郎先生がいらっしやいましたので、とにかく私は天野先生につきまとして、無理矢理に押し掛け弟子としていろいろ疑問点をお教えいただくということで出発いたしましたようなわけで、図書館方面はむしろ私の師匠筋に当たるわけでございます。」

要するに谷沢は師としての天野から、自身の目で確認したもの以外は信じるなという一見、単純で貫こうとすればひどく負荷のかかる方法を実践する以外に書誌学の王道などないことを教えられたのである。そのことは、同じ本の別の箇所でも言及しているのだが、長くなってしまうので、引用はしないでおく。

書誌学の困難さを言いたいがために寄り道をしすぎたかも知れない。代わり映えしないのだが、書評にかこつけて私の言いたいことも少しだけ紛れ込ませておくというのが、私の目論みである。

林望著：「書誌学の回廊」(平凡社、1995年)は書誌学の入門書としても読める好著であるが、書誌学は地味で習得が困難で、興味が無い人には何が面白くて、こんな世界にどっぷり漬かっていられるのか不可解というのが多くの人の正直な感想かも知れない。しかし、そんな書誌学音痴?の人でもこれを読めば、書誌学という学問も捨てたものではないなという感想が持てる程度には書誌学の世界が分かるはずである。簡単に書誌学の入門書として誰が読んでも面白いと書いたが、よく考えればこれは大変なことである。

書誌学の最低限度の知識くらいは職業上の必要から身につけているはずの図書館員にとっても、書誌学の学問的世界に踏み込むことは空恐ろしいことに思えるのではないか。

だから世の書誌学の徒はこぞって、書誌学の特殊な世界を素人相手に力説しても仕方がない、分かる人だけ分かってもらえば結構という諦めの境地に甘んじてきたのではないのだろうか。その常識を覆してみせたのが、りんぼう先生こと林望というわけである。

慶応大学の文学部国文科から大学院博士課程終了まで、脇目もふらずに勉学と研究に励

み東横女子短期大学に職を得てから、ふとした偶然からイギリスに渡り、ケンブリッジ大学の所蔵する古書の目録「ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録」の編纂を任されることになる。イギリスでの生活体験から、最初のエッセイ、「イギリスはおいしい」が書かれ、後は矢継ぎ早にイギリスと書誌学を中心的なテーマとした一連のエッセイが刊行されたことは誰もが知るところである。

「書誌学の回廊」というタイトルは、この著作のまえがきが「書誌学の回廊を巡りて」と題されているところから採られている。そして文字通り、一人前の書誌学者として成長してきた過程を簡潔に語っている。彼を導いた師である森武之助、阿部隆一に言及し、その厳しい指導にも触れている。例えば、斯道文庫の研究室でおこなわれた書誌学の実習演習は、その後の彼の人生を決定するまでの大きな意味をもった経験であったが、それはこんな風におこなわれた。

演習が開始されると弟子たちは、めいめい斯道文庫の書庫に所蔵されている古書を任意に取り出してきて、それらについて、見よう見まねで「書誌」をつくる。それを師たる阿部隆一が度の強い近眼の目の眉根の辺りに深刻そうな皺を寄せて、厳しく点検し、疑問な点があると、容赦なく詰問し、再調査を命ずる。弟子たちは慌てて額に汗しているいろいろなことを調べて報告する。かくて弟子たちのノートは散々に訂正され、たぶん原型を止めないまでに訂正されて、お許しができるとというのが毎度の光景であつたらしい。この厳しい実習は夜の更けるまで続いたと林望は記している。

「書誌学は地味な上にも地味な、そうして辛気くさい学問である。お、これは面白い、という書物に巡り合うことは、おおむね千点も調べてようやく一点という確率であろう。のこりの九百九十九点は、ただ忍耐して調べる。そして、その忍耐が「書誌」という道になるのである。」

林が自己の書誌学観を披瀝している部分をそのまま引用してみたのだが、彼の著作の随所に少しばかり言葉は違っても繰り返して語られていることである。

林が言いたいのは、書誌学はどんなに大切な学問であることを力説しようと門外漢には理解しがたいことであり、けして面白可笑しいことではない。したがって、書誌学に関係した書物が多くの読者を獲得することは期待できず、であれば売れない書物としての書誌学がらみの書物は、たとえ啓蒙書のレベルであっても出版を期待することはむずかしいということになる。だから書誌学者、林望のエッセイが続々と出版されるというのは、やはり希有のことなのだ。例えば、この「書誌学の回廊」にしても、書誌学の知識がない人にも理解できるようにやさしく具体的な例をあげながら書かれている。しかし、ただやさしく書かれているだけでは、名著にはならない。素人相手だからと言って程度を下げずに、しかも専門用語の羅列で退屈だと投げ出されない文章力と内容が要求される。どんな書物でも、それは必要条件でとりたてて強調するまでもないと言われてしまいそうだ。しかし、林の手腕は並大抵ではないようだ。読み終えてもどうしてこうも書誌学のエッセイが面白いのだと考えこんでしまう。例えば、「見ること記すこと」と題されたエッセイには、阿部隆一から教えられた書誌記述の方法があらまし以下のように記されている。

すなわち、「書誌」は全部で九項目の要素に分解でき、それについていちいち分析的に観察するという。そして、その九項目とは、一、表紙 二、封筒 三、首目 四、本文巻頭内題 五、版式・写式 六、尾題 七、跋・後語等 八、刊記・奥付・奥書 九、その他の特記事項、である。この九項目の要素は、ごく大まかな分け方であり、それだけ柔軟な記述が可能だということである。例えば、この阿部式の書誌データの作成方と対照的な

のが国文学資料館の方式であり、ここで使用されている書誌調査カードには、三十四項目(＝要素)の記入箇所がある。少し煩雑になるが厭わずここに列挙してみる。

1：刊写の別、2：所蔵者名、3：調査員認定作品名、4：叢書名等、5：合集状況、6：所蔵者整理署名、7：整理番号、8：外題、9：内題、10：柱(題)、11：刊写年次、12：残存状況、13：保存状況、14：箱帙袋等(およびその材質)、15：蔵書印、16：序跋、17：編著者名、18：時代ジャンル等、19：表紙、20：装丁、21：見返し、22：巻数、23：料紙、24：数量、25：寸法、26：匡郭、27：表紙以外の紙数、28：一面行数、29：絵、30：書入、31：用字、32：刊記・奥書・識語・極札・箱書・公告その他、33：補記、34：その他。

国文学資料館の方が阿部方式に比較すると断然詳細である。ところがデータ項目が詳細だから優れた書誌ができるという単純な結論に結びつかないのが、書誌学の難しさというものか。林によれば、書誌学の知識のない素人を大量に使って、安価にかつ迅速に書誌データを作成しようとするれば、その書物にとって必要であるか否かを問わず、一様に細かい要素に分解して、誰でもそれなりの記入ができるようにせざるを得ず、決して好んでこの方式を選択しているわけではないのである。言ってみれば、マクドナルドのマニュアルのごとく、客の誰であるかを問わず一律に四角四面の対応をするしかないという理由から生じてくる事情だということである。書誌学の専門家が書物にたいすれば、その書物の個性に応じて、本当に必要な要素を一目で見抜いて、そのことだけを重点的に誌すことができる。必要のない事項は省略するが必要な情報は細大もらさず盛り込むことができるのが専門家であり、専門家にとってはマクドナルドのマニュアルは、煩雑で柔軟な対応を阻害する邪魔者でしかない。マクドナルドのマニュアルを例に引いた林の説明は明快である。

著者は書誌学の基本用語とも言うべき語彙について、簡略な解説を終えると、次に写本と刊本はどう区別するか、同様に活字本と整版本はどうしたら、判別できるのか事例にもとづいて解説する。写本と刊本の区別に関しては、ベルリンの国立図書館を訪ねてその館の蒐集している古書の閲覧を乞うたとき、エヴァ・クラフト博士なる女性から一冊の書物を示され、それが写本か刊本かと問われた経験について記している。その一冊の刊本とは「仏説観無量寿経」上巻であり、日頃から古書を見慣れている林には迷う余地のない易しすぎる問題でしかなかった。これはベルリンの国立図書館を訪れて、短期間にできるだけ多くの本を、それも書庫内で直接縦覧したいという身の程知らずの申し入れをした生意気な若造の実力をためす意味の質問であったわけだが、むろん阿部隆一門下として厳しい研鑽を積んだ林から見れば取るに足りない初歩的なものでしかなかったわけである。しかも林はこのエヴァ・クラフト博士を相手に書誌学の方法論についてひるまず自説を説いてさえている。すなわち、限られた時間で本を調査するのだから、ありふれたつまらない本をみても仕方がないだろうから、蔵書のうちの良いものだけを選んでみたらとすすめるクラフト女史に対して、阿部隆一から教わった書誌学の根本は、むしろありふれた本ほど、人口に膾炙したということであり、つまり文化史的に複雑で大きな存在であり、学問的には、むしろ希少な本より尊いという自説を説く。エヴァ・クラフト博士はドイツにあって日本の古書を研究するハンディを補うために、古書籍店、弘文荘の反町茂雄がドイツに来るたびに教えを請うていたのである。しかし、林の考えでは反町は確かに書誌学に通じてはいたけれども、古書籍商という制約から、知識の重点がどうしても価格の高いいわゆる貴重書に偏りがちであったことを指摘している。文化史的価値と市場価格から見た貴重書、希少本の価値とは別であることを忘れてはいけないというのが、師から学んだ林の持論でも

ある。

本阿弥光悦の印刷工房で嵯峨本が作られる場面を空想で描いた「嵯峨本を夢む」の章も面白い。「書誌学者、見てきたような嘘を言い」と言いたくなるくらい、林の根拠ある空想から生まれた印刷工房は生き生きと臨場感にあふれている。この文章を読んだ人はもう一度嵯峨本を見たいと思うのではなかろうか。その時、嵯峨本は新たな美を見せてくれるかも知れない。

最後に「刊」、「印」、「修」という三つの述語の正確厳密な使い分けについての林のこだわりに触れておきたい。すなわち、長沢規矩也・阿部隆一の書誌学の方法を遵守するならば、こららの三つの述語の意味をきちんと理解して、正確に使い分けることさえできれば、刊本であるかぎり、その文献の学術的価値を正しく目録や解題のうえに反映できるというのである。現実には口に「書誌」となえる人でも、我流、恣意的にこの言葉を使うので、多くの書誌はその所掲の文献がどういう位置にあるものかさっぱり分からず、その状況は現在でも一向変わらぬどころか両先生の亡き後、然るべくその学問を継承する場も失われてむしろ以前より悪くなっているのではないかとまで言っている。

林の文章は間違えのびやかで、自信にあふれているように見えるが、肝腎の書誌学の未来については決して楽観していない。かりに図書館員がこの本を読んで、あらためて書誌学の意義と奥深さにめざめ、いまさらに「書誌学」を学ぶ必要性を痛感してみてもどうなるものでもないのである。学問としての書誌学の寒々とした現状が根本的に改まることはないという林の諦観は変わりはないだろう。

私はどこにも発表していないのだが「書誌学者のルサンチマン」という文章を書いたことがある。書誌学者の仕事や思想、言動に何かしら底深い敵意を感じることはなぜなのかという疑問から、その根拠を私なりに説明しようとしたものである。あまりうまく説明できなかつたので、私の文章は完結せずに宙ぶらりんのままにとどまっているのだが、林のこの本を読むことで、私の疑問は解答を見出したと思っている。というより、もう無用になったというべきかも知れない。なぜなら、たぶん労多くして報われることの少ない書誌学者の暗鬱な世界という私の一面的な思い込みを打ち破る力をこの本はもっていると思うからである。

ところで、書誌学の深淵などという思わせぶりなタイトルがなぜ必要なんだというもつともな疑問が突き付けられそうなので、一言弁解すれば、要するに迂闊に書誌学の世界に踏み込めば、たちまちその深みに引きずりこまれそうな怖さもあり、底の知れない深みと見えるものが、魅力でもあるという風な世界でもあるという私なりの思いを示すものだと受け取ってもらえればいいのである。

本当は、冒頭に書いたように、西洋書誌学の専門家としての高宮利行の「愛書家のケンブリッジ」と対比させながら、その類似と相違を論じて見たいという目論みがあったのだが、私の筆力では限られたスペースで要領よくそれをこなすことは到底不可能であることはすぐに分かった。したがって意味なく名前だけがあげられている高宮利行は、ただちにその名前を削除すべきなのだが、機会があればまた取り上げてみたいということで、羊頭狗肉の謗りは承知であえて残して置くことにしたい。

(しのはら・としお／京都大学法学部図書室)

新企画

大 図 研 京 都 数 珠 つ な ぎ

皆さん、あけましておめでとうございます。

さっそくですが、大図研京都支部報に話題の新コーナー登場です。初の視聴者参加番組（でもないか・・・）、「大図研京都数珠つなぎ」の始まり始まりい～。そうなんです。タイトルを見ていただければ察しのいい方にはもうお分りですね。念のため、察しの悪い方のためにご説明いたしましょう。平たくいえば、大図研京都会員の「誌上自己紹介リレー」、もう少しわしくいえば「『笑っていいとも：テレホン・ショッキング』の大図研京都支部報版」というわけです。もうわかったでしょう。ルールは以下の通り。

- ① 内容は自己紹介（自分の職場紹介、自分の家庭紹介、自分の趣味紹介など）を中心に政策的意見（図書館界、職場、世の中に対する提言など）、仕事の悩み、マル得情報・ウラ情報、逆に「困っています誰か教えて下さい」公告、随筆、短篇小説、4コマ漫画、詩、など何でもOK。別にカタい内容でなくてもいいし、十分カタくてもいい。
- ② 原稿分量は1ページ前後（多少の増減可。特に「増」については大いに可）。
- ③ 末尾で、次回の執筆者を簡単な紹介文（指名理由）つきで指名して下さい。（「日頃お世話になっている～さん」とか「～で一緒したご縁で是非私生活をあばいてみたい～さん」とか）。京都の大図研会員ならだれでもOKですが、このさい、あまり一般に知られていない人材を発掘しましょう。
- ④ もちろん、指名された人は拒否権なし。執筆期限等については編集担当の方よりご連絡いたします。

いかにも安易な企画ですねえ、というなかれ。これも会員間の情報流通と親睦をかねた企画なのだ（それに、原稿依頼の手間も省けて一石二鳥、イッヒツヒ・・・）。

それじゃあ皆さん、ある日突然自分のところに順番が回ってくるのを楽しみに（ヒヤヒヤ）しながら、原稿のネタ、ちゃんと考えといて下さいね。

（第1回登場は□□の○○さんです。←お楽しみ）

お詫びと訂正

ワープロの編集ミスで1995年9月号（127号）、10月号（127号）と127号が2回出てしまいました。従いまして、10月号を127号→128号、11月号を128号→129号、12月号を129号→130号と訂正し、本号を131号と致します。ここに不手際をお詫びし訂正致します。